

エルヴェシウスに対するルソーおよびディドロの 哲学・教育論争について

— フランス啓蒙思想における認識・道徳・能力の諸問題 —
(その3)

永 治 日 出 雄

(教育学教室)

I エルヴェシウスに対するルソーの批判

1. エルヴェシウスに対するルソーの態度
2. 『《精神論》への覚書』におけるエルヴェシウスへの批判
3. 『フェーブル草稿』におけるエルヴェシウスへの批判
4. 『エミール』におけるエルヴェシウスへの批判
5. 『新エロイズ』におけるエルヴェシウスへの批判

(以上第25輯, 1976年3月)

II ルソーに対するエルヴェシウスの批判

1. ルソーの『覚書』に対するエルヴェシウスの態度
2. 『人間論』執筆の構想と刊行への経過
3. 『人間論』におけるルソーへの批判 その1 — 一般的特徴
4. 『人間論』におけるルソーへの批判 その2 — 能力の問題をめぐる
5. 『人間論』におけるルソーへの批判 その3 — 道徳の問題をめぐる
6. 『人間論』におけるルソーへの批判 その4 — その他の問題に関連して

(以上第26輯, 1977年3月)

III エルヴェシウスに対するディドロの批判(上)

1. エルヴェシウスとディドロとの関係 その1 — 従来の評価について

1773年夏, 『百科全書』刊行の大業を完了し, オランダのハーグに滞在したディドロは, デピネ夫人にあてた書簡のなかでつぎのように語っている。

「私はエルヴェシウスの遺作を三度読みました。これはすぐれた書物だと私は信じます。ここには世人が発見しえない精妙な考察が充ち溢れ, また世人がすこし手を加えれば, 矯正できる矛盾も, 数多く見出されます。」^(註1)

この手紙に記されたエルヴェシウスの遺作とは, いうまでもなく『人間論——人間の精神的能力と教育について』であり, この地においてディドロは歴大な『エルヴェシウスの

『人間論』への体系的反駁』を書き始めるのである。

エルヴェシウスの論述への批判として、ディドロは『人間論』への反駁』とは別に、『エルヴェシウスの『精神論』への考察』と題する小品を1758年に綴っている。そして、ディドロならびにエルヴェシウスという十八世紀フランスの代表的な唯物論者に関し、相互の異同や関連を知るうえで、これらの作品が重要な資料であることは言うまでもない。いま筆者はこうした資料を中心としつつ、両者の関係についてやや詳細な検討を開始するのであるが、ディドロによるエルヴェシウス批判をめぐる、これまでいくつかの相異った評価が下されていることをあらかじめ指摘しておきたい。

これまでの評価のなかで、エルヴェシウスの思想とディドロの思想に関し、同質性あるいは類似性を強調する説明がまず認められる。すなわち、ディドロは『精神論』および『人間論』で提示された主張に基本的には賛成であり、ただそこにおける論理の飛躍や極端な結論を批判したにすぎない、というのである。この種の説明は、たとえばグロスマンやモンジャンの論述のように^{註2)}、キリスト教などさまざまな観念論的なイデオロギーとの対決において、フランス唯物論の全体を明確にする場合にしばしば用いられる。

なお、これらふたりの思想家の同質性を肯定するに止まらず、ディドロが『精神論』の作成に参加した、と解する人々が古くから存在した。こうした人々のうちには、十九世紀にディドロの定評ある全集を編集したアセザやディドロのすぐれた評伝を著述したモーレイも含まれる^{註3)}。そして、このような解釈の多くが、ディドロの卓越性や組織力を称讃するとともに、『精神論』の独創性や影響力を疑問に付していることは事実である。

これら二種とは対照的に、エルヴェシウスとディドロの異質性や相違点を力説する論述も珍らしくない。こうした論述のなかで、コンペレーやカッシーラは、エルヴェシウスの理論を浅薄で凡庸であると難じ、おなじ唯物論者であるディドロからすら、手厳しい反駁を蒙ったと主張する。カッシーラなど高名な歴史家によって主張されたこのような見解が、これまで日本において、エルヴェシウスやディドロへの理解に相当の影響を与えてきたことは否定できない。

とはいえ、ふたりの唯物論者の相違と対立を重視しつつ、たんに両者の優劣を論ずるのではなく、それらが生ずる思想的な必然性を探求する試みも企てられている。エルヴェシウスとディドロとの間の理論的な対立は、フランス啓蒙思想の基本的矛盾の所産であり、唯物論の歴史的発展の表出ではなかろうか——このような試論は、プレハノフをはじめとし、クライトンやベスによって提起され、今日における研究の起点をなすといえるのである^{註5)}。

以上に列挙した種々の評価の詳細、およびそれらに対する筆者の判断は、次節からの論述の適所で提示することとなる。

2. エルヴェシウスとディドロの関係 その2——『精神論』等の執筆をめぐる

ディドロが『精神論』の作成に関与したとの推測は、まず啓蒙運動と相容れぬ反対勢力の側で芽生え始めたらしい、ダミアンの国王暗殺未遂事件を契機とする思想弾圧の強化によって、『百科全書』と『精神論』にとりわけ攻撃の鋒先が向けられたことはよく知られている。こうした弾圧と迫害のなかで、1758年から翌年にかけて、ジャンセニズムの論客ショーメエは、『精神論』の論述と『百科全書』の記載を列挙比較し、両書の関連が密

接であることを詳論した。また、検事総長フルーリもショーメエの書物に依拠しつつ、「精神論」を告発するにあたって、誤謬と恥辱の源である『百科全書』の抜粋にほかならぬと断定した。啓蒙運動への敵意がとくに激しい状況において、『精神論』の匿名の著者と『百科全書』の編集者を同一視することは、むしろ自然の勢いであったかもしれない。

しかし、ふたりの唯物論者の共同執筆という解釈は、彼らが世を去ったのち、主としてディドロの信奉者の中で囁かれたのである。確かに、もしもエルヴェシウスやドルバックの作とされる書物が、実際にはディドロの援助のもとで著述されたとするならば、フランス唯物論に占めるディドロの位置は、際立って大きなものと評価できるであろう。このような解釈を強めたのは、グリムやディドロとともに『文芸通信』の担当者であり、ディドロに協力し心酔していたマイステルであった。『ディドロの霊に捧ぐ』と題する文章のなかで、彼はつぎのように記している。

「ディドロが書き、ディドロしか書きえない美事な文章を、『精神論』や『自然の体系』のなかにたやすく認めえない文筆家があるだろうか。もしも、我々がこうした事例をさらに数えあげるならば、あまりに多くの忘恩の徒を暴くこととなり、ここで称えようとする故人の霊を、かえって苦しませることになる。」^{註7)}

マイステルの示唆は、ディドロ全集の編集者アセザに受け継がれ、1875年に刊行された第二巻の解説では、ディドロを『精神論』の共著者あるいは鼓吹者と呼んでいる。^{註8)}しかし、定説ともみられたこの憶測は、1954年に発表されたトパチオの論究によって、ほぼ覆えられたと筆者は考える。彼はエルヴェシウスとディドロの間における協力の有無あるいは程度について、学問的な検討を試みる必要があるとして、つぎのように述べる。^{註9)}

「我々はこの問題に関するさまざまな事実をいっそう解明し、また『精神論』と『人間論』の文体および内容について仔細に考察し、さらにはこれらの書物に対するディドロの批判を注意ぶかく吟味した。こうして我々は、エルヴェシウスの原稿執筆にディドロがなんら関与していない、との確信を得たのである。」^{註7)}

トパチオの検討を参照しつつ、まず『精神論』の刊行にいたるエルヴェシウスとディドロの人間関係を調べてみよう。エルヴェシウスは1751年まで徴税請負人の地位にあった。この間にエルヴェシウスを囲むいわば上流の階層は、ディドロの交際範囲とは異っていたらしい。マルモンテルの回想によれば、エルヴェシウスらが集ったジェフラン夫人のサロンから、ディドロは排されていたらしい。^{註10)}またディドロと緊急な間柄にあったグリムは1759年の『文芸通信』のなかで、エルヴェシウスとの交際の浅いことを述べ、『精神論』とのかかわりを否定しているのである。

「『精神論』という書物が、そのもたらした非常な苦痛を償うほど、大きな名譽をエルヴェシウスに与えるものであるか否か、私は知らない。けれども、フランスにおいて思想と言論の自由にもたらした打撃を償うほど、『精神論』が人類にも、学芸と哲学の進歩にも有益でないことは本当らしく思われる。(中略)『百科全書』の敵たちは、いかに多数で強力であろうとも、この計画をディドロから奪い取り、彼の厩大な仕事を利用しつつ、ジェスイットの手によって継続することには失敗した。彼らが流したあらゆる冊子の秘かな目的は、『精神論』の著者に与えたと同じ打撃で、この哲学者を倒すことにあった。そして、こうした目的は前例のない憎しみと残忍さをもって遂行された。彼らは破滅させることを狙いとし、エルヴェシウスの著作の反抗

的な箇所は、すべてディドロの筆による、とあちこちで吹聴したのである。しかしながら、ディドロはエルヴェシウスとなんらの関係もなく、彼らは年に二度ほども会っていない。「精神論」のなかにディドロらしい品性や持味を認める者は、趣味も感覚も欠如しているに相違ない。^{註11)}

つぎにこの問題を「精神論」の文体や内容に即して検討するとどうであろうか。エルヴェシウスは当初に志した詩作についてはヴォルテールから、のちの哲学的な著述についてはフォントネルから指導を受けた。「精神論」の文体では、さまざまな事例や史実による豊富な例証も、ひとつの特徴をなしているが、これはフォントネルの影響と思われる。このような例証や論理の単純化から生ずるエルヴェシウスの簡明な表現は、ディドロの文章とは異質であり、のちに示すとおり「〈精神論〉への考察」のなかで厳しい批判を浴びるのである。^{註12)} 以上のようなトパチオの分析に加えて、「精神論」を構成する論理と理論それ自体が独創的であることを指摘したい。たとえば、利益や教育という概念の独得な用いかたをはじめとし、環境の重視から教育改革の構想へと進む独自の論理展開、さらには感覚主義を貫徹した体系的な社会理論など、このようなエルヴェシウスの著作の特徴は、ディドロはもとより、それまでの他の著作家が書いたものには見出し難い、と判じうるであろう。

さて、1758年から「人間論」の完成に至る期間に、エルヴェシウスとディドロの交流はどのようなであったか。「百科全書」と「精神論」に向けて同時に加えられた思想弾圧が、ふたりの唯物論者を接近させたことは充分に考えられる。また、晩年のエルヴェシウスはドルバックと親しく交際し、ドルバック男爵のサロンの常連の多くは、エルヴェシウス夫人のサロンにも集まったと伝えられる。^{註13)} しかしながら、トパチオは「人間論」の作成についても、ディドロの関与を否定する。彼によれば、ディドロがエルヴェシウス家に入出した証拠は、マルモンテルやモレレの記録にもなく、両者の人間関係は稀薄であったと察せられる。^{註14)}

これに対してやや異なる推論を試みるのはスミスである。彼は「精神論」に関するトパチオの見解を支持しつつ、エルヴェシウスの草稿を読んだと述べる「〈人間論〉への反駁」の文章からエルヴェシウスへのより親密な接近を推測する。^{註15)} たしかに1760年12月に書かれたソフィーあて書簡は、こうした人間関係を彷彿たらしめる。

「エルヴェシウスとソランと私は、昨夜かなり議論しました。彼らは公正という感情も、背徳という観念も有しない人間が存在する、と主張したのです。私たちが激しく弁し合っているところへ、いつものように御婦人が来られ、判定者となってくださいました。ヴァロリ夫人、デピネ夫人、それにドルバック夫人が、座られたのです。怨恨への怖れのほうが、悪意よりもはるかに強いことは私も認めました。けれども、徳がたんなる言葉でないとすれば、このような怖れに徳の本質から生ずる感情を結合してほしかったのです。私はいかに墮落した魂からも、徳という刻印が消滅しないよう望んだのです。」^{註16)}

とはいえ、スミスもまた「人間論」への関与については、ディドロがエルヴェシウスの取扱う論題に意見を述べた程度にすぎないと結論する。主題や力点の相違を別とすれば、「人間論」の文体や論理が「精神論」のそれと変らず、ふたつの著作が同一の人物の筆によると感じられることも、こうした結論を裏づけるであろう。

なお、エルヴェシウスとディドロとの関係をめぐっては、さらにひとつの謎が存在する。すなわち、百科全書派の代表的な思想家に数えられるエルヴェシウスが、『百科全書』に寄稿していない事実である。ディドロは早くも1749年のペリエあて書簡のなかで、尊敬や友誼に値する人物として、ヴォルテールやダランベールとともにエルヴェシウスを挙げている^{註17)}。このような評価にもかかわらず、『百科全書』への参加がみられないのは、やはり両者の交際が稀薄であったためであろう^{註18)}。しかし、筆者はさらにつぎのような推察を付加したい。近年なされたブルーストの精緻な研究は、『百科全書』の協力者の幅広さをあらためて感じさせるとともに、ディドロが権力側に身を置く人々を、執筆から極力排除したことを示している^{註19)}。エルヴェシウスの個人的な人柄や活動は別として、民衆の怨差の的である徴税請負人への執筆の依頼に、ディドロが消極的であったとの推測は誤りであろうか。

3. 「〈精神論〉への考察」におけるエルヴェシウス批判

ディドロが世を去ったのち、カザリン二世によって買い取られた草稿と蔵書のなかに、『精神論』の初版が発見され、そこには沢山の書き込みが見出されたという。それらの書き込みは判読の困難なものが多く、今後さらに解明を必要とするが^{註20)}ディドロが行った『精神論』の精読の証左となることは勿論である。また、それはやがて『〈人間論〉への反駁』へと発展するエルヴェシウス批判の最初の作業であったに違いない。

さて、1758年8月15日の『文芸通信』は、『精神論』の刊行と反響に関するグリムの紹介のあと、ディドロの筆による書評を掲載した^{註21)}。これが『エルヴェシウスの〈精神論〉への考察』として知られる小品であって、後年の『〈人間論〉への反駁』に比較すれば、はるかに簡略とはいえず、『文芸通信』の批評としてはむしろ長文に属する^{註22)}。

エルヴェシウスとディドロの人間関係は、前節で吟味したとおりであるが、『〈精神論〉への考察』に掲げられる冒頭の一節は、エルヴェシウスの人格や生活に関するディドロの理解が、どのようであったかを簡潔に示している。なお、ここに画かれたエルヴェシウスの姿は、彼についての重要な資料のひとつ、友人サン・ランベールによる評伝とほぼ一致している^{註23)}。ディドロは書き始める。

「これほど騒ぎを惹き起した書物もない。取り扱われた論題と著者の名前が、騒ぎを大きくしたのである。著者は十五年も以前からこの書物に着手した。彼は七、八年まえに徴税請負人の職を去り、結婚して文芸と哲学の研究に専念した。彼は一年のうち六ヶ月を田舎で暮し、身内の少数の人々とともに隠栖閑居している。パリにもまた彼は非常に快適な屋敷をもつ。幸福になるために、まさしく彼はなんの不足もない。なぜなら、多士済済の友人、魅力ある妻、すぐれた感覚と知性、世間からの尊敬、莫大な財産、そして身体の健康と精神の快活さ、等々を有するからである。」^{註24)}

こうした前書きに続けて、ディドロは『精神論』の構成の順序に従い、論述の要約と彼みずからの論評を綴っている。この書物の第一篇は認識をめぐる問題であって^{註25)}、エルヴェシウスとルソーとの論争でも鋭い対立を誘発した箇所である。人間精神の働きをすべて感性に還元し、判断することは感覚することであると説くエルヴェシウスの理論は、ディドロによってもまた『〈人間論〉への反駁』のなかで執拗な批判を加えられている。しかし『〈精神論〉への考察』においてディドロは、このような認識論を本格的に論議するのではなく、むしろ戯画的に描出し疑問に付すのである。

「『精神論』の著者は、精神のあらゆる機能を感性に還元する。彼によれば、知覚することと感覚することは同一であり、判断することと感覚することも同一であり、等々。彼は人間と動物の相違を身体構造の相違にしか認めない。だから、人間の顔を獣のように長くし、犬に似た鼻、眼、歯、耳に変えてみよう。そして、全身を毛で覆い、動物の四脚で立たせてみよう。たとえソルボンヌの博士であろうとも、そのように変身した人間は、犬の機能しか果せない。彼は議論すべき代りに骨をかじるであろう。彼の主たる活動は、匂いのする場所に近づくことであり、彼の魂の大半は鼻にある。彼は無神論者や異端者を探索する代りに、飼兎や野兎の足跡を追う。これとは反対に一匹の犬を捕え、後足で立たせ、頭部を丸くしてやろう。その顔を短くし、瓜と尾を抜いてやろう。かくしてひとりの博士が得られ、彼は神の予定や恩寵という神秘的な事柄について、深遠な考察をめぐらすのである。^{註26)}

『精神論』の第二篇は、功利主義の道徳理論が中心である。宗教的な規範や観念論的な原理から解放された新しい道徳を確立することは、ディドロの場合も生涯をとおし探求した課題であった。エルヴェシウスによれば、善とは人々に快楽や福祉をもたらす事柄にはかならず、利益こそ価値を決定する基準なのである。このような彼の功利主義に対して、『『精神論』への考察』は道徳意識の独立性と特殊性を主張する。とはいえ、ここでもディドロはみずからの道徳理論を積極的に提示しているのではない。彼が記した論評は以下の如くである。

「価値を定めるものは利益であり、絶対的な正義および不正は認めえない、と著者は言う。これが彼の第二の逆説である。しかし、このような逆説はもともと誤っており、確立されれば危険でもある。誤りとみなすのは、我々を苦痛に晒す自然的な欲求、生命、生存、身体組織および感性のなかに、正義と不正の永遠的な基礎が発見できるからである。一般利益ならびに個別利益は、正邪の概念を多種多様に变化させるが、それは副次的なものにすぎない。実際に正邪の観念は、一般利益と個別利益をとおし、さまざまに変身するが、その本質は独立している。著者を誤謬に導いた原因を考えてみると、正義と不正が無数の相異った形態で現れる事実に関心を奪われ、基礎と本質を認識すべき人間の本性に眼を閉じたからである。^{註27)}

ついでディドロが言及するのは、素質と能力の問題である。『精神論』の第三篇でエルヴェシウスは、精神的素質は平等であるとの有名な命題を提起した。彼によれば、人々の間に認められる知性や徳性の優劣は、生れながらのものではなく、環境と教育の所産なのである。こうした主張に対して、とくに『新エロイズ』のなかでルソーが反論したことは、すでに筆者が論証したところである。ディドロはエルヴェシウスの理論について、細部においては魅力に富むが、基本的には誤りとし、つぎのように原理的な批判を試みる。

「この論述全体の誤謬は、下記の原理に起因すると思われる。すなわち、①原因が長期にあるいは絶え間なく作用する場合には、原因がどれほど僅かな相違であろうとも結果として現れる相違は驚くほど大きい——この事実を著者は知らないか、無現していると察せられる。②性格の多様さ、つまり冷静な人や鈍重な人、悲しげな人や陰気な人や快活な人があることを、著者は考えない。また、人間をさまざまな年令、病氣と健康、快楽と苦痛などと結びつけて考えない。簡単に言うならば、人間は身体組織にちょっとした異状があっても、まったく様子が変わってくるではないか。脳髓の微か

な変質が、天才を愚鈍な状態に突き落すのである。こうした変質が偶発的でも暫時的でもなく、本来的で恒常的であるならば、どのような人間になるであろうか。③人間と動物の相違を身体組織に帰着させたのであるから、天才と凡人の相違を別の原因に帰着させるのは矛盾している——このことに筆者は気が付かない。』^{註28)}

『精神論』の構成はさらに第四編へと続いて、最後には学習方法や教育内容の改善が提案されている。しかしながら、この篇については論じられた題目の若干を列記する程度にディドロはとどめている。さて、これまでに引用した彼の文章の調子からも、『精神論』の執筆への参加は、疑わしいものと感ぜられるが、トパチオにより否定の論拠とされた、叙述の仕方への批判を、つぎに示してみよう。

「この書物はきわめて体系的であるが、ここに主要な欠陥のひとつが存する。なぜなら、第一には体系という装置のため、論述が冷却し、重苦しく冗長となっている。第二には天馬空を行く雰囲気をもった欠如している。第三には牽強付会との印象が強い。第四にはとくにこの書物にあてはまるが、逆説を語りたならば、気取らずに素直かつ穏やかに論証してほしい。逆説を好む著者だとしたら、言葉だけを差出してはならず、つねに証明を繰り上げるがよい。読者の魂のなかには忍び足で入り込むがよく、荒々しく振舞ってはならない、これこそモンテーニュの偉大な手腕であって、論証するとはみせず、つねに論証し、黒を白とも、白を黒とも言いぐるめるのである（中略）なおまた、この書物には挿話が一杯であることを指摘したい。挿話というのは、目的もなしに面白可笑しく話す人の談話や書きもののなかでは、驚くような効果を収めることがある。反対に体系的な著者の場合には、こうした挿話は特殊な事実にすぎず、むしろ充分な論拠と無難な事例を要求される。『精神論』に盛り込まれた事例には、趣味と選択の好ましくないものが見出される。その脚註についても同じことが言いうるのであろう。もしも厳格な友人がここで著者を助けたとしよう。一筆でもって彼は不快な記述を取り除けたであろう。』^{註29)}

以上が『〈精神論〉への考察』の概要である。ディドロはルソーとおなじく、認識・道徳・能力に関するエルヴェシウスの基本的な原理に容赦ない反論を浴びせたのである。しかし、『精神論』の欠陥と逸脱は、ルソーよりもディドロにとって、はるかに痛切であったと思われる。こうして有力な唯物論者や感覚論者の陥った誤謬を克服することが、ディドロの生涯の課題となる。『〈精神論〉への考察』で素描された論点は、晩年の大作においていっそう入念に吟味され、いっそう緻密に論議される。なぜなら、そこでは他人の著作を批判することではなく、むしろ自己の理論を形成することが、主要な目的だからである。本稿はここで『精神論』に対するディドロの総括的な評言を記し、次回には『〈人間論〉への反駁』の検討へと進みたい。

「『精神論』は価値ある人物の作品である。そこには誤った一般的原理が数多く見出されるが、細部においては無数の真理が含まれている。著者は形而上学や道徳について大声で語っている。しかし、同じ論題を扱い、尊敬を獲得したいと望む文筆家は、これを仔細に眺めるがよい。建物のわりには、装飾が小さい。想像によるところが多すぎる。想像で論ずる仕方ほど攪乱され無視されることはない。この書物への激しい非難は、偽善者がいかに多いかを示している。強く主張するには、著者の論証がときに弱すぎる。主張する場合には、明確かつ明快に語ることが第一である。すべ

てを考慮すれば、この書物はあらゆる分野の偏見に、棍棒で痛烈な一撃を与えたことになろう。したがって、これは人々に有益である。モンテスキューの『法の精神』を特徴づけ、ビュッフォンの『博物誌』に一貫する天才の輝きは認められないとしても、『精神論』は、我々の時代の偉大な書物に数えられるであろう。^{註30}

[注]

- 1) Diderot, Correspondance, par Roth, etc., Paris, 1955. Volume 13, P. 37.
- 2) Grossman, Philosophy of Helvetius. New York, 1926. 146～149. および Momdjan, La Philosophie d' Helvétius, traduit par Katsovitch, Moscou, 1959. P. 250～251.
- 3) Morley, Diderot and the Encyclopaedists, London, 1891. Volume 2. P. 123. アセザについては次節であらためて言及する。
- 4) Compayré, Histoire critique des Doctrines de l' Education. Paris, 1898. Tome 2, P.P. 195～204. および Cassirer, Die Philosophie der Aufklärung, Tübingen, 1932. P. 33.
- 5) Plekhanov, Essais sur l' Histoire du Matérialisme. Paris. 1957. P.P. 76～77. および Creighton, Man and Mind in Diderot and Helvétius. (Publication of the Modern Language Association of America, New York, 1956. Volume 71. P. 706) さらに Besse, Observations sur la Réfutation d' Helvétius. (Diderot Studies, Genève, 1964. Volume 4, P. 29.)
- 6) Smith, Helvétius - A Study in Persecution, Oxford, 1965. P.P. 149～150.
- 7) Meister, A Mânes de Diderot. この作品は、アセザの編集によるディドロ全集に収録されている。筆者はこれに従った。(Diderot, Oeuvres complètes, par Assezat. Tome 1. P. XV II.) なお、引用した文章については、マイステルが書いたのではなく、ディドロに師事していたネジョンが加筆した、との説もある。cf. Smith, op. cit., P. 186.
- 8) Diderot, Oeuvres complètes, par Assezat, Tome 2. P. 265.
- 9) Topazio, Diderot's supposed Contribution to Helvétius' Works. (Philological Quarterly, Iowa, 1954. Volume 33. P. 314.
- 10) Ibid., P. 314
- 11) Grimm, etc., Correspondance littéraire, philosophique et critique. Paris. 1878. Tome 4. P.P. 80～81.
- 12) Topazio, op. cit., P. 314～316.
- 13) サン・ランベールやモレレとともにドルバックは、エルヴシウスが息をひきとるのに立会ったと言われる。cf. Wickmar, Baron D' Holbach, New York, 1968. P.P. 99～100
- 14) Topazio, op. cit., P.P. 323～325.
- 15) Smith, op. cit., P. 188
- 16) Diderot, Correspondance. Volume 3. P. 281.
- 17) Ibid., Volume 1. P. 302
- 18) Topazio, op. cit., P. 316～317.
- 19) Proust, Diderot et l' Encyclopédie, Paris, 1967. P. 20～21. なお、プルーストは、ディドロの政治理論の形成に関連し、『精神論』からの影響は稀薄であることを論証している。Ibid., P.P. 399～403
- 20) Lioublinski, Sur la Trace des Livres lus par Diderot, traduit par Carrive. (Europe, 1963. Numero Diderot, P. 283～290.)
- 21) Grimm, etc, Correspondance littiraire, Tome 4. P.P. 29～30 エルヴェシウスに対するグリムの評価は、ディドロのそれとかなり異なるが、詳しい検討はここで省略する。cf. Keim, Helvétius - Sa Vie et son Oeuvres. P.P. 425～428.

- 22) この書評は『文芸通信』のなかでは、傑出したもののひとつと言われる。なお、『文芸通信』をめぐるグリムとディドロの関係については、つぎの書物が参考になる。Smiley, Diderot's Relation with Grimm, Urbana, 1950. P. 88
- 23) たとえば, Saint-Lambert, Essai sur la Vie et les Ouvrages d'Helvétius. (Helvétius, Oeuvres complètes, par La Roche, Paris, 1895. Tome 1. P.P. 174~176.)
- 24) Diderot. Réflexion sur le Livre de l'Esprit par Helvétius. (Oeuvres complètes par Lewinter, Paris, 1970. Tome 2. P.P. 239~240)
- 25) 『精神論』の内容とこれに対する筆者の評価については、つぎの論文を参照して頂きたい。拙稿, エルヴェシウスの思想の構造と史的位罫。(季刊 科学と思想, 新日本出版社, 1977年, 第25号, 125~128頁)
- 26) Diderot, Réflexion sur le Livre de l'Esprit. (Oeuvres complètes, par Lewinter, Tome 2. P. 240)
- 27) Ibid., (Oeuvres complètes, Tome 2. P.P. 242~243.)
- 28) Ibid., (Oeuvres complètes, Tome 2. P.P. 243~244.)
- 29) Ibid., (Oeuvres complètes, Tome 2. P.P. 245~246.) 引用した最後の文章も共著説を否定する証拠と思われる。
- 30) Ibid., (Oeuvres complètes, Tome 2. P.P. 247.)

(昭和52年9月1日受理)

エルヴェシウスに対するルソーおよびディドロの
哲学・教育論争について

— フランス啓蒙思想における認識・道徳・能力の諸問題 —
(その3)

永 治 日 出 雄

(教育学教室)

愛知教育大学研究報告 第27輯 (教育科学) pp. 1~9 (別刷)

1978年3月1日

Reprinted from

The Bulletin of Aichi University of Education

Vol. XXVII (Education Science) pp. 1~9

Kariya, Japan

March 1, 1978